シリーズ●戦争の証言⑩

後藤蔵人

満州—修羅の群れ

満蒙開拓団難民の記録

太平出版社

著者紹介

後藤　蔵人（ごとう くらんど）

1909年福岡県に生まれる。1929年福岡師範学校卒業。1934年東京で治安維持法違反容疑で検挙され，起訴猶予となり小学校教師を退職，満州に渡る。1941年旅順師範学校専攻科卒業。翌42年吉林省舒蘭県四合屯在満国民学校長になる。敗戦後は小学校教師，福岡県教組久留米支部長，小学校長などをへて，1968年退職

満州＝修羅の群れ—満蒙開拓団難民の記録

1973年7月16日　第1刷発行
1979年6月15日　第7刷発行

¥1300

著　者　後藤　蔵人
発行者　東京都千代田区神田神保町1-46　崔　容徳
印刷者　東京都板橋区舟渡1-8-1.　ミツワ印刷

発行所　東京都千代田区神田神保町1-46-2　美成社ビル
株式会社　太平出版社　©
電話 03-295-3531(代表)　振替東京1-99563

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

シリーズ・戦争の証言（第一期・全20巻）を完結するにあたって

1　一九七〇年から準備をすすめてきましたシリーズ・戦争の証言は、八年をかけて、ここにようやく第一期・全20巻を完結するはこびになりました。ながいあいだ熱心など支持を賜わりました読者の皆さまにふかくお礼を申上げます。

もしこのシリーズが、むなしく風化しようとする一五年戦争の体験を正しくうけつぐ作業に多少でも貢献をすることができれば、わたくしたちの最も幸いとするところです。

2　この八年のあいだに、戦争体験を継承する作業が、戦争の体験者ばかりでなく、ようやく「戦争をしらない」世代にうけつがれはじめたことを、わたくしたちはつよく感じております。しかし一方には、「防衛力」強化の名による途方もない軍事力の拡張にみるまでもなく、日本軍国主義の復活への試みが、陰に陽に、さまざまな形で執拗につづけられていることも、見のがすことができません。

3　わたくしたちは、一五年戦争によってむなしく失なわれていったおびただしい生命と肉体が、いまだに真に弔われぬまま怨念の魂となってアジアの地を彷い空に満ちている、と認識しています。忘れることのできないあの日の体験の集積を、いっそう国民全体のものにすることは、やはりさし迫って重要なことに思われます。

4　戦争中またはその前後に書かれた記録や資料（日記・メモ・手紙、その他）をお持ちか、その所在についてお心当りがありましたら、どのようなものでも結構ですから、小社までご一報下さい。すぐれた記録については、関係者のご承諾を得て、シリーズ・戦争の証言（第二期以下）に加えて刊行したいと思います。

一九七八年七月七日

太平出版社　シリーズ・戦争の証言　編集部

シリーズ・戦争の証言 10

満州＝修羅の群れ——満蒙開拓団 難民の記録

地　図……12

I　ふしぎな列車……13

四合屯高知開拓団13　つのる不安の日日25　ふしぎな列車とソ連軍の侵入30　悔恨と自嘲39

II　敗　戦……46

天地逆転46　敗戦の報告61　日の丸の旗を焼く67　U団長事件74

III　ときの声……91

デマか真実か91　ソ連軍の現地占領97　逃亡兵士108　ときの声112

IV　難民の群れ……135

郡上135　難民の群れ143　Kくんの奥さんの逃避行151　桃山収容所163　娘の死174　立売りの行列180

V　屍の山……191

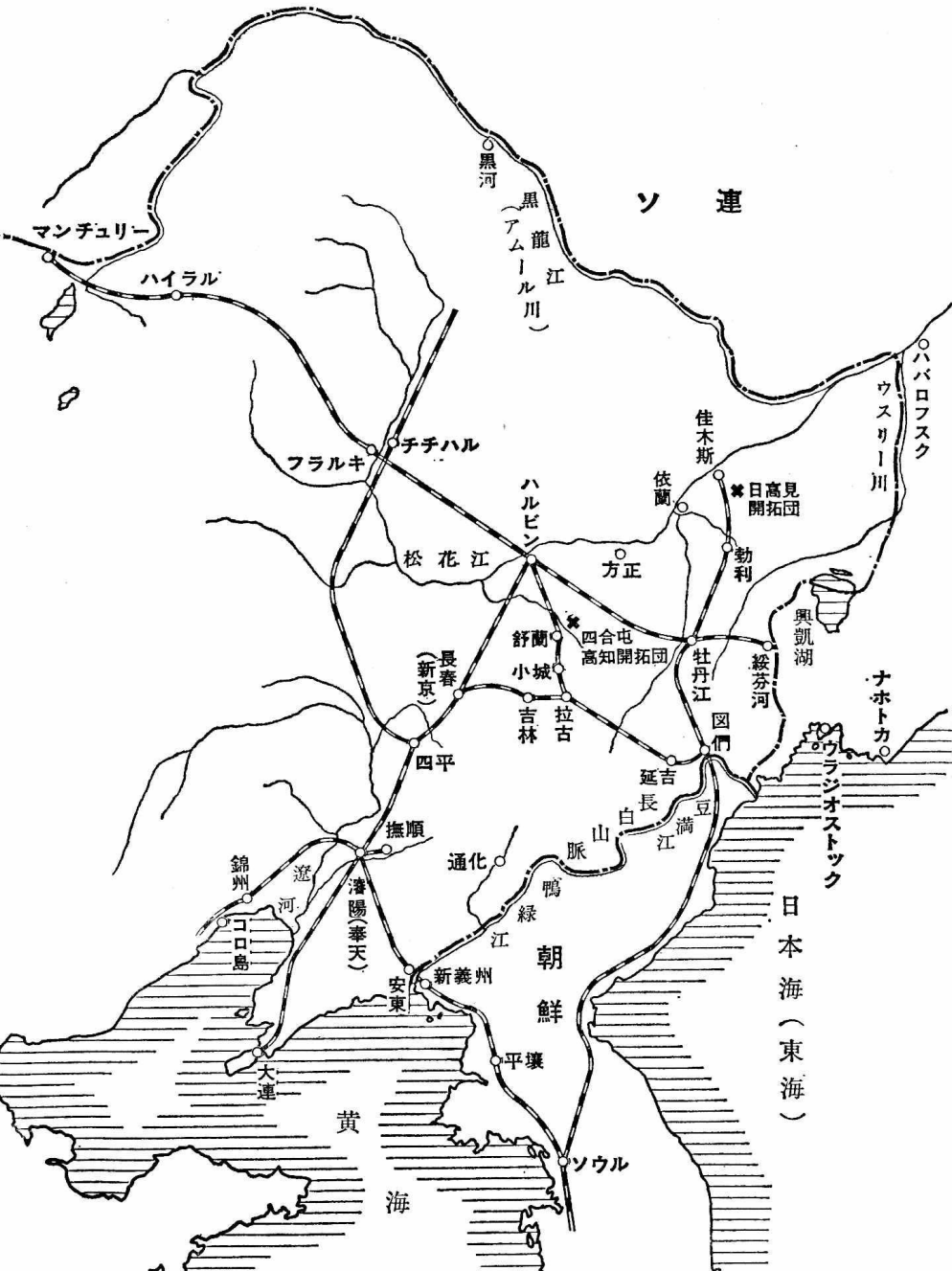
永安収容所191　悪夢の記憶197　屍と糞尿の山215　一千体の火葬240　日本引揚げのしらせ245　生きて帰るとき249

あとがき……255

挿絵＝井原　美義

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

中国東北部（満州）地図


ソ　連
黒河
黒龍江（アムール川）
マンチュリー
ハイラル
ハバロフスク
ウスリー川
チチハル
フラルキ
ハルビン
松花江
佳木斯
依蘭
日高見開拓団
勃利
方正
興凱湖
舒蘭
四合屯高知開拓団
牡丹江
綏芬河
長春（新京）
小城
吉林
拉古
ナホトカ
図們
四平
延吉
ウラジオストック
撫順
長白山脈
豆満江
通化
錦州
遼河
瀋陽（奉天）
鴨緑江
コロ島
安東
新義州
朝鮮
日本海（東海）
平壌
大連
黄海
ソウル

I　ふしぎな列車

四合屯高知開拓団

そのときわたしは、団員Nくんの家で、今日の魚つりの話や、ふと見たふしぎな列車の話などをしていた。

と、戸外でわたしを呼ぶ妻の声がした。

「……？　なんや？　家に入らんか」。

こういいながら、わたしは気にもかけず話を続けていたが、いつまでも入ってこないので、

「なんや？」。

と妻の方を向くと、

「早く！　ちょっと……」。

と押し殺した鋭い声がかえってきた。なんだろう、子どもでもどうかしたのかなと妻の側に近寄ると、たそがれに照らし出された妻の表情にただならないものを感じた。

「なにかあったんか」。

「いまね」。
と妻はちょっと息をのみこんで、
「小城町の満人(当時中国東北部の中国人をそう呼んでいた)の警官がきてね、昨日か一昨日、ソ連が攻めこんできたって！」。
「ソ連が？　どこに？」。
「満州(中国東北部)によっ！」。
「満州に！　ソ連が?!……満州にソ連が攻めこんだ?!」。
「ええ、たしかに、そういいましたよ」。
わたしは絶句して、「ソ連が攻めこんだ」と口の中で復唱しながら、その意味するものをどう受け止めたらよいかとまどった。ふと、頭の中が真空になったようだった。
――それは、一九四五（昭和二〇年）八月一一日の夕暮れ時であった。
わたしは、この日からはじまる満州全土をおおった大混乱と、そしてその大混乱の荒波にもまれ死んでいった難民たちの記録を述べるにあたって、その背景の一つである四合屯高知開拓団――この小さな静かな村のたたずまいから書かなければならない。

そこは、ハルビンから南東へ拉古(らこ)を経て吉林に通じる鉄道の中間地点にあたり、この鉄道に沿って川幅二〇メートルくらいの、満州にしては珍らしいきれいな川が流れていた。川の両岸には

柳などの灌木が生い茂り、ちょうど日本のどこかのように、その緑したたる蔭にはフナ、ナマズ、シーリンなどの魚が群居して、ここに住みついている日本人開拓団員たちに親しまれていた。

この開拓団は、四国の高知県出身者を主として結成され、土地の名をとって四合屯高知開拓団と称せられる、四五戸（人口一六〇人あまり）の小さな開拓団であった。

その付近は、この鉄道と川の左右に五～六〇〇メートルの山山がうっ蒼とした樹木を盛って遠くまでつづき、山山にはさまれた豊かな平野が広くなったり狭くなったりしてひらけていた。そこには日本からやってきた開拓団――大日向（長野県）、水曲柳（長野県）、郡上（岐阜県）など、十幾つかの開拓団――が、一〇キロから、二～三〇キロをへだてて点在していた。四合屯開拓団は郡上開拓団に近接していた。

どこの開拓団員たちも、似たりよったりの事情で満州に出てきた人たちらしいが、この四合屯の人びとも、かれらの話から総合すると、かれらの故郷土佐の高知、四万十（しまんと）川沿いの土地は山また山ばかりで、先祖代代から切りひらいた段段畑は山頂に達し、そこを肥桶をかついで登り降りして作る農耕生活と大地主の所有する山林の賃仕事くらいでは米のメシにもめったにありつけず、かれらは、トウモロコシやアワやイモなどが常食というみじめな生活しかできなかった。

そこへ、おりから国をあげて満州開拓奨励が鳴り物入りで宣伝されるようになったので、さっそくそれにとびついて、六年ばかりまえに家財を売りはらい、少しでもましな生活がしてみたい

一心で満州に脱出、ここに第二の故郷を築いていたのだった。

満州にきた当初は、家も建てなければならず、また慣れない風土とたたかわなければならず、たいへんな苦労をしたらしいが、いま、かれらの生活は、数ヘクタールの水田と畑をあたえられた大地主であり、中国人や朝鮮人を小作や日雇いとして使える、山国高知とは比較にならぬ豊かな暮らしをしていた。

しかし、この夢のような生活にも、絶えず胸のどこかに痛みを呼び起こすトゲのようなものを忘れることができなかった。それは、あまり口には出されなかったことだが、自分たちの土地は、満州拓殖公社とかいうえらい役所からあたえられたものであり、その役所は日本の軍事力でできた満州国という秩序のなかで、いま自分たちが使っている中国人や朝鮮人たちから、タダ同様で買いあげたというよりも、強奪した土地であるということであった。むろんそのことは、自分たちが直接やったことではなかった。入植してみてわかったことだったが、どうも寝覚めがよくなかった。満州国は、五族協和（漢人・満人・蒙古人・その他の五民族が仲よくするという意味）の国だ、日本人が指導者となって満州農業振興の開拓者となるのだと教えられた。また、関東軍から馬と小銃をあたえられ、もし一大事（ソ連との戦争や中国人の暴動など）が起こったら、関東軍と協力して満州国を守るのだ、と説かれた。

見渡したところ、どの中国人を見ても、よごれた顔に無知な目をして、ただ人のよさそうな笑顔で日本人を迎えてくれた。四〇戸ばかりの中国人は畑作りに雇われた。朝鮮人も二〇戸ばかり

あった。この人びとも開拓団が入植した時、自分たちがやっと作りあげていた水田をとりあげられたが、おとなしく開拓団員の水田の小作人となった。

「あんたたちは中国人とちがって、わたしたちと同じ日本人じゃけにな。特別に協力してくれるだろうの。わたしたちも、あんたたちを兄弟と思うとるけに」。

というぐあいに懐柔して使っていた。朝鮮人たちも、朝鮮でよほど苦労したとみえて、団員たちに協力的であった。思ったほどトラブルもなく、安定した一つの「秩序」ができた。

開拓団員たちは、自分たちよりはるか下層の人種を見る思いで中国人や朝鮮人をながめて安心した。

それでもやはり、毎日顔をあわせている中国人や朝鮮人たちが、土地をとりあげられたことをどう思っているだろうかという不安は、ひょいひょいと頭をもたげて団員たちの心を痛めた。そしてそのことが何かのひょうしに団員たちの口の端にささやき交されることもあった。そんな時は、ドブロクの勢いを借りて、まるで悪魔でも追っ払うような勢いで、「勝ってくるぞと勇ましく」と、軍歌を高らかに歌って手拍子を打ち、肩をいからしてまぎらわすのであった。

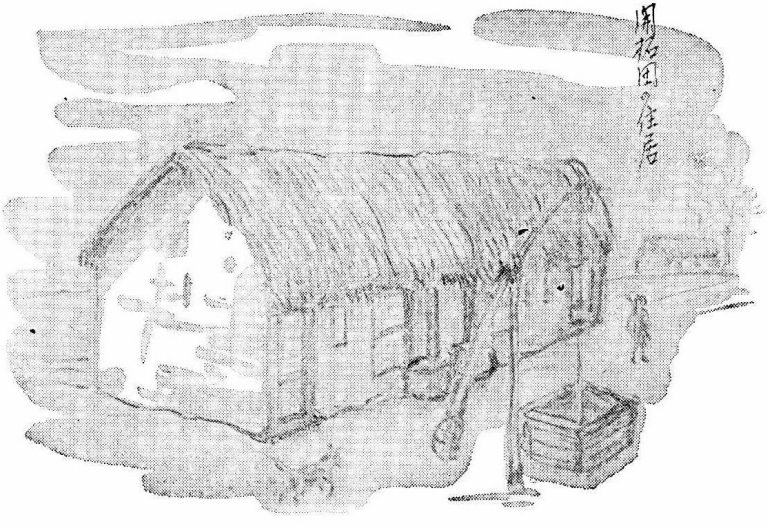
土地をとりあげられた中国人たちは、山辺の草地を開墾したり、開拓団員の小作や日雇いをしたりして、時勢に適応して生きる術をみいだしていた。かれらはいままで、中国の長い歴史が物語るように、先祖代代、いくども災難にあった。飢饉の年もあったし、同民族の戦乱にまきこまれて家を焼かれ、財産を持ち去られたこともあった。しかし、こんどのように、先祖代代の土地

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

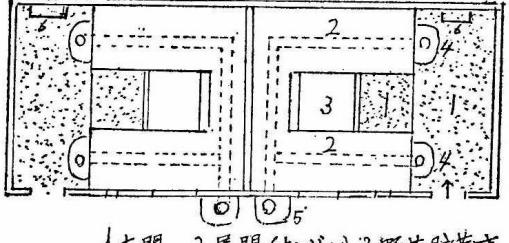
を、しかも他国人にとりあげられたことはなかった。それでもかれらは、「没法子（メイファーズ）」（しかたがない）と、いままで災難に会うごとにくり返してきたこのことばをはきだして、あきらめたようで決してあきらめないさとりに似た無表情で生きていた。

四合屯には、開拓団を中心にした、日本・中国・朝鮮民族の入りまじった集落が三つできていた。団本部と学校のある集落がいちばん大きく、そこは約五〇〇メートル四方の土塀にかこまれ、その中央には、東西南北に走る四メートル幅の道路があり、道の東側は三〇戸ばかりの開拓団員の家が整然とならび、西側には、中国人・朝鮮人の家、それに団本部と（日本人の）学校、ほかに五～六戸の開拓団員の家があった。土塀はその高さ約四メートル、底部の厚さなど一メートルもあるが、まるっきりの土造り、四すみには銃眼などを設けて「一大事」のばあいに備えてある。また東西南北の土塀と道路と交叉するところには、大きな木製の扉が設けてある。

この土塀の集落を貫いて南北に走る道路は鉄道に沿って遠く続き、南は五キロほどで小城というこの地方の中心的な町（駅と警察と村役場があり、郡上開拓団のあるところ）に至り、北は約五キロで四合屯のもう一つの集落があり、そこには土塀もなく、日本・中国・朝鮮の人びとの家が十数戸寄りそうように建っていた。また西方の山辺にも同様の一つの集落が見え、そこへはろくに道もついていなかった。どの家も草屋根に土煉瓦つくりという、当時の中国の田舎にいけばどこにでもある家屋構造で、開拓団員の家が中国人や朝鮮人の家と格別変わっているわけではなかった。



住居間取図（著者手稿）



1.土間　2.居間（オンドル）3.野菜貯蔵庫
4.炊口　5.煙突　6.流し台

家の構造は、間口一六メートル、奥行八メートルくらいの大きさ、まん中を仕切って二戸建になっているのが普通だった。家を建てるには、土煉瓦（トーピーズ）といって、土と草を練りあわせて四角にしたもの（日本の赤煉瓦の四倍くらいの大きさ）を天日に干してカチカチにし、それを積みあげて土を塗り、厚さ五〇センチくらいの壁をつくる。屋根には木材や木の枝をくくりつけ、その上に湿地に生えている細長い草を干したのをぶ厚く積み重ねて葺くという、ひどく原始的な家である。

まず、出入口になっている幅一メートルくらいの重い木製の扉を引いて家の中に入ると、うす暗い土間があり、突きあたりが炊事場になっている。土間と居間との間には壁があり、壁の中央に居間に通じる扉、その左右にはオンドルの炊き口兼炊事用のカマドがあって、大きな釜がドカンと坐っている。居間に通じる扉を入ると、左右に高さ五〇センチ、広さが一〇平方メートルぐらいのオンドルの部屋がある。居間にはアンペラといってコーリャンの茎を編んで作ったものが敷いてあったり、油紙を張りつけたりしてある。二つの居間の間は、上が押し入れ、下が土を深く掘った野菜貯蔵庫になっている。居間にはそれぞれ高さ二メートル、幅一メートルほどの障子窓があり、これに油紙を張っただけで雨など防げるだろうかと心配したが、満州は雨が少なく、雨も零下三〇度の寒さもどうやらこれで防げるのだ。いくつかの家には、この障子の下部に、三〇センチ四方くらいのガラスを一枚はめたりして、それがいかにも文明の利器でもあるかのように誇らしげに光っていた。紙を張ったすすけた天井からは、ランプが下がっていて、開拓地の遅れた文化を物語っていた。

満州の一般都市にある日本人住宅は、中国人の集落を避け、指導者らしいていさいを保った赤レンガのどうどうたる家なみを連ね、二重のガラス窓にスチーム（またはペチカ）という文化住宅だったから、そういうところに長年住み慣れてきたわたしたちの家族は、この開拓団の家に案内され、一歩その室内に入ったときは、覚悟はしてきたものの、まったく度胆をぬかれ、なんともいえないわびしさにうちのめされたのであった。

団本部といっても名ばかりで、普通の家屋を内部改造しただけのもので、そこには机と椅子が何脚かと、書類が積み重ねられているだけだったが、学校は日本大使館直轄だったためか、わずかに「権威」を保っていた。それでもこの開拓団の財政を象徴するかのように、土煉瓦造りの草ぶきであることに変わりはなく、ただ窓だけは障子でなく、一重ながらも総ガラス張りで、ピカピカ光っているところに団員たちの心意気が察せられた。二教室に職員室、だるまストーブに薪を燃せば極寒でもけっこう暖かだった。児童数五〇人ばかり、校長のほか訓導一人・小使一人という構成で、わたしはそこの校長兼訓導として赴任して三年めを迎えていた。

都会での根無し草のような教育にあきたらず、地についた全村教育を求めていたわたしは、親友K君が開拓団の学校にとびこんだことにも刺激されて、志願してこの村にやってきた。赴任したとき、「先生、牛乳一ぱい」とコップに出された白いものを一口飲んで目を白黒させているわたしに向かって、「ドブロクです。この村じゃあ、これが飲めなきゃ校長はつとまりませんぞ」とすごんでいた土佐の荒くれ男たちも、年月がたつにつれてわたしを理解し、酒なしで団の運営に

ついても真剣なまなざしで相談をもちこんでくるようになった。この団は、団幹部が意欲的でなく、団員たちの不信をかっていた。また、団員たち自身も、安逸に慣れ、田や畑も中国人や朝鮮人にまかせて、働くことより釣と猟とドブロクの世界を楽しむという、いったいになげやりな風潮があった。したがって、若い団員たちや、少しまじめにものごとを考える人たちは、そのうっぷんをわたしのところへもってくるようになった。わたしは、学校教育の基盤がこんなことではどうにもならないと考え、青年たちと夜の学習会を開いたり、他の開拓団を見学にいったり、また、学校園の収穫で図書を買い、兼山文庫という小さな図書館を職員室の中に設けたりした。「兼山」としたのは、土佐藩興隆の士 野中兼山の名をとって、開拓に夢と意欲をもたせようと考えたのである。兼山文庫は児童の読み物だけでなく、おとなたちのための本も備え、家庭にも貸し出して団員たちにも親しんでもらうことにした。そのうちに、有志たちの度かさなる進言にしたがって団長更迭を思い立ち、この一年ばかり奔走してやっとのこと、四月、郡上開拓団の有力幹部を団長として迎え入れることに成功した。郡上からきたU団長は、活発な発展を続けている郡上開拓団のファイトをその若い瞳にみなぎらして、この団の経営刷新にのりだした。

四合屯の生活はまことに原始的ではあったが、市街地にくらべて自然の変化にともなう人間の営みに楽しさがあった。

話が少しわき道にそれるが、再びこの世に現われないであろう、また現出させてはならない開拓地の四季をスケッチしておきたい。

なんといっても一年中でいちばん喜びに満ちるときは、やはり春であった。一〇月からの根雪が、三月になるとやっと溶けだし、黒くよごれた雪がとろんとまるみをおびて水滴を落としはじめ、よごれた水流となり、雪がまた降ったりしてカチカチに凍ることがあっても、暖かい日ざしが二〜三日続くと、雪の間からみずみずしい黒い土が、生れ変わったような表情でまぶしそうに顔を見せた。四月になると、日本人も中国人も朝鮮人も、待ちかまえたようにカゴと草取り鎌を持って土の上をはいまわり、ノビルやカンゾウなどの野草を掘って歩く。貯蔵庫の野菜がみな干からびて、人びとはビタミンの欠乏を訴えているのである。そうこうするうちに春と夏が一度にやってきて、あらゆる植物が音を立てて伸び、山には親指ほどもあるやわらかいワラビが群生し、あたり一面は真白いスズランのしとねが敷かれて甘い香をただよわせる。そこでわたしたちは弁当をひらく。まさに気の遠くなるようなひとときであった。

川や池の氷も溶け、そこらでグワグワと鳴き交し、団員たちの猟銃にねらわれて飛び立っていたカモの群れもいつの間にか去ってしまうと、釣の季節と種まき作業とが一時にやってくる。ようやく掘り起こせるまでに溶けた水田には、団員と朝鮮人とがドロンコになって日本式の田植をはじめ、畑では馬を使った大陸農法でコーリャン・大豆・トウモロコシなどが播かれていく。

満州には梅雨がない。カッと強烈な日ざしが照りつけ、入道雲が湧き立ったかと思うと滝のような雨をともなった雷雨がやってくる。広い外畑には、雑穀のほか、ローベ（赤大根）・バレイショなどの換金作物が大量に作られ、土塀内の家家に付属している一〇アールほどの内畑には、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com